

## 【地域の概要】

- 当該地区は、関ヶ原町西部の山間地域に位置する。整備済みの農用区域内の水田では日本型直接支払交付金を活用した農地維持活動に取り組んでいる。
- 比較的条件の良い整備済みの農用地では、農事組合法人による農地集積が進み水稻中心の農業経営が図られている。
- 上記に該当しない農地では、個人農家が水稻のほか自家用野菜の栽培を行っている。

## ①取組開始前の状況や課題

**1. 不在村地主の増加と耕作意欲の減退による不作付農地の増加**

- 少子高齢化や人口流出により、耕作者不在の農地が増加している。
- 鳥獣被害が多発し、農業者の耕作意欲が著しく減退している。
- 家族の人数が減少したことにより農作物の消費量が減少し不作付農地が増加、また、行き場のない野菜の処分が課題となっていた。

**2. 町内そば店からの要望に対する野菜の出荷**

地産地消に関心の高い地元そば店からの「見た目等は問わないので地元で穫れた野菜を出荷してほしい」との要望に応え、令和2年春から地域の女性グループが中心となって自家用に生産した野菜の出荷を行っている。

**3. コロナ禍を背景としたコミュニティ機能消失の懸念**

感染症拡大防止のための措置としてステイホームが提唱されたことにより、各種寄合いは非対面となるなど、農家同士のコミュニケーションが図られにくくなり、孤独感や喪失感を持つ女性の存在を農地利用推進委員が察知。



## ②取組内容

### グループで「山中農園」での野菜栽培を開始（令和3年3月）

- 地域女性に声を掛け、耕作者が不在となり荒廃地化が懸念されていた農地10aを活用し、野菜栽培の取組みを開始。時間帯や栽培場所を分けるなど間隔を取りながら、開放的な農地で交流を深める活動を実施。地域外の女性農業委員も賛同し仲間に加わり、和気あいあいと活動している。
- 女性推進委員が町内のカフェへ積極的に販売促進を図る。



### 町内のカフェへ出荷（令和3年4月）

- 町内のカフェが趣旨に賛同し、使用する品目の要望について委員と打合わせを行った。トライアル期間を設けたのち、定期的に出荷を開始。
- カフェから「ハーブがほしい」との要望を受け、バジル栽培に挑戦し、ランチメニューの材料として提供された。



## ③今後の展開と方向性

### 「望まれる品目」と「取り組める品目」のマッチングにより魅力を高める

- 当初は鳥獣被害の少ない品目であることが作付けに「取り組める品目」の条件であったが、「望まれる品目」とのギャップを痛感。
- 鳥獣被害対策を講じつつ「取り組める品目」を選定していく必要がある。今後は女性ならではの感覚を駆使し、実需者との会話を重ねて「望まれる品目」をキャッチし要望に応え、やりがいを高め「山中農園」での活動を広げていく。

# 女性農業者の輪広げる農園を 推進委呼びかけ活動グループを設立

関ヶ原町農業委員会



【岐阜】関ヶ原町農業委員会（兒玉文夫会長）は、女性委員が農業者らに呼びかけ、活動グループ「山中農園」を設立。野菜生産や飲食店への農産物販売を通し、女性農業者のコミュニティや実需者と生産者のつながり作りに取り組んでいる。

呼びかけたのは、藤井裕子農地利用最適化推進委員・農業委員会活動を通じて地元そば店の「見

た目は問わないので地元野菜がほしい」という要望を知り、2020年から地域の女性農業者らと自家用野菜をそば店へ出荷する活動グループを立ち上げ、販売を始めた。

しかし、コロナ禍で集まるのが難しくコミュニティ活動が回りくくなくなったことから、女性農業者の孤独感や喪失感を減らしたいとみんな

藤井推進委員とそば処幸山の店長の中辻康貴さん

距離を取って野菜を生産する「山中農園」を立ち上げた。圃場は、男性委員の協力を得て、耕作者不在で荒廃地化が懸念されていた農地10アを活用。杉山立子農業委員も賛同し仲間に加わり、圃場内でエリアを分けるなど間隔を取りながら、開放的な農地で和気あいあいと活動の輪を広げている。

野菜の販売先も藤井委員が積極的に開拓に奔走。取り組みに賛同した町内のカフェの「ランチメニューの材料にハーブがほしい」という要望を受け、パジル栽培にも挑戦している。

当初は、鳥獣被害の少ないジャガイモなど「取り組める品目」の栽培のみだったが、パジルなど「望まれる品目」とのギャップを痛感したという。藤井委員、「今後は女性ならではの感覚を駆使し、実需者との会話を重ねて『望まれる品目』を捉え、鳥獣被害対策を講じながら『取り組める品目』とマッチングしたい」と話す。仲間とともに、今後もちがいを高める活動を広げていく。